

日中のことばから捉えた文化と神経症

吉 沅洪・酒木 保

要 約

日本人と中国人とでは、対人関係の持ち方に違いがある。日本人は「粹」に拘る。日本語の「うち」と「そと」、「裏」と「表」、「本音」と「建前」は連動しており、「粹」によってもたらされた対人関係である。中国人は血縁に拘り、中国語の「里」、「表」は日本語ほど機能的ではない。しかし、「面子」に拘る表現が多様である。内閉神経症と視線恐怖症は日本文化特有のものであると言われており、「裏」と「表」に関係する。一方、中国人は直接身体に症状として出現する心身症が多い。これは面子への強い拘りと関係する。このような症状の出現様式の違いはそれぞれの文化特有の対人関係と密接に関係している。日本人と中国人との対人関係の構造を比較することで、神経症症状の出現様式が文化によって異なることについて考察した。

はじめに

一般には、日本人は家や所属集団（会社など）を中心とした人間関係に縛られている印象をもつ。それに比べて、中国人は血縁を中心とする人間関係である（吉、投稿中）。つまり、中国では血のつながりさえあれば、すべての人が家族であると考え、血縁関係を何よりも重要視するのである。

そして、日中それぞれの民族は特有の文化を持ち、その文化を背景とした対人関係の持ち方がある。それぞれの対人関係の特徴は日本と中国の歴史から見て取ることも可能である。日本では陥落させた敵を、味方として用いたが、中国ではたとえ子どもであっても敵の血を引く者は徹底して絶やしていった。国土の広さの違いからこのような違いが生じたのであろう。

つまり、国土の狭い日本では、人も土地も資源として考えられ、粹の中に囲ってあげば一様安心できたのである。そして、囲われた粹の中にあっては、その中に融合す

ることが無難とされた。粹の中の異質な存在は受け入れられるのが困難であり、粹から排除される運命にあるからである。たとえば、頼朝と義経の関係に見るように、血縁であったとしても突出した人材は抹殺される運命にあった。

これに対して中国では、あまりにも国土が広く、目の届かぬところで、新たな力に再生する可能性を含んだがゆえに、いかなる相手であっても、それが敵であるなら血を徹底して絶つという行為に出たのであろう。このようなことから中国では血縁中心の関係が育ち、日本では粹中心の関係が育っていったものと思われる。

このような考えに基づくならば、歴史を背景として構築された文化が、民族特有の対人関係の在り様を創り上げ、その文化特有の不適応状態を醸成することも考えられるのである。人格の発達には文化を背景とした対人関係の在り様が大きな要因となるように思われる。

目 的

本論では、家中心、集団中心とする日本文化での対人関係の持ち方と、血縁を中心とする中国文化での対人関係の持ち方とを、日常用いられることばを比較分析することによって、両国文化間の対人関係の違いを明らかにする。また、文化を背景として生ずる対人関係の様式が、その国の文化特有の神経症症状を醸成する可能性について若干考察する。

I 自己紹介に見る日中比較

日常用いられることばのなかには、その国の文化背景をきわだたせている対人関係が表現されていることがある。自己紹介はごく日常に見られる、他者に向けた挨拶にすぎないが、日本と中国とでは大きくその形態が異なるように思われる。さしあたっては、日常の習慣である自己紹介の仕方について、日中比較から始める。

1 日本人の自己紹介

他者に対して自己紹介をするならば、「京都文教大学の酒木です」と言う。これは、個人の後ろ側にあるもの、つまり、自分の所属している集団名を個人として持つ資格、アイデンティティや自分自身の名前などよりも優先させているのである。従って、自分の所属している集団を優先し、それを表に出して自分の名前を後ろに付けているといっていよい。どちらかといえば、自分の持っている資格、たとえば臨床心理士、カウンセラーといった個人に付与された資格はあまり全面に出さないといったことが見受けられる。特に日本人の場合、外に向かって自分を位置づけるには、「場（集団）」といった、個人が所属している「枠」が社会的集団構成、集団認識に大きな役割を持っているのであって、個人の持つ資格は第二の問題とされているものと考えられる。つまり、自分の所属をまず明らかにすることによって、知らない他者との「間」でそれとなく線引きをするものと思

われる。そして、所属している集団内部のことや、個人のバックグラウンドについては、知り合った最初の段階ではあまり語らないのが、一般的である。

2 中国人の自己紹介

中国人の自己紹介は、順番としては個が優先される。つまり「私は吉です」と自分個人の名前をまず相手に伝える。それから「私は京都文教大学の助手を勤めています」と所属する集団（会社）、ならびに自分の身分を相手に告げる。話がはずむにつれて、自分の出身地、家族などを話題にすることがある。何よりもまずは「個」を主張し、それから自分のバックグラウンドについて話していくのである。「個」については、自分はどこで生まれたか、どこで教育を受けたか、今している仕事の内容が何であるかなどである。特にバックグラウンドは主に自分の家族や親戚のことを意味する。たとえば、結婚しているかどうか、夫（妻）はどこの人か、両親の職業、兄弟が何人いるか、そして何をしているかなどについて話すのである。このようなことは、自分が言わない場合には、相手の方からまず聞いてくる場合が多い。バックグラウンドをお互いに確かめ合うことによって、つながりを探そうとしているようでもある。自己紹介の仕方においても、このように日中では目的や形式が大きく異なるのである。

II 「うち」と「そと」から見た対人関係における日中比較

1 日本文化の「うち」と「そと」

そして、日本人の場合には自分の所属する集団を「うち」と呼ぶ。「うちの学校」「うちの職場」などはごく日常に用いられることばである。

しかも、「うち」は「うち」の学校や会社の中にあってもできるのである。「うち」の学科ではと言うのが典型であろう。さらに、「うち」の学科の中にも「うち」

ができるのである。「うち」ができればそれと同時に「うち」以外のところは「そと」、「よそ」になり、これまで「うち」であったところに「そと」、「よそ」が発生する。つまり「うち」を作る度に、「そと」ができあがり、「うち」と「そと」はたえず連動していることになる。

また、日本人の場合は自分の所属する会社や学校を主体化して捉え、「うち」つまり一人称である「私」の学校あるいは会社になるのである。そして、相手の学校や会社は「よそ」あるいは「そと」となるのである。これを日本文化を背景として考えると、職場は個人が一定の契約関係を結んでいる企業体であるという、自分にとっての客体としての認識を持たない。「うち」である学校や職場を主体化して位置づけている。このように主体化することによって「内のもの」と「外のもの」との区別けをしている。これを実際の人間関係に置き換えてみると、極端な行為の差異として出現する。例を挙げると、電車に乗るときなどを見ていると横にいる人が知らない相手であれば突き飛ばしてでも座ろうとするが、相手が「うち」の職場の人でしかも上司であったなら、自分がどれだけ荷物を持っても席を譲ろうとするであろう。さらに集団単位で行動するような場合にはもっとはっきりしてくることがある。たとえば職場の仲間と行動している場合に、「よそ」の人々に対して冷たい態度をとったり、また、「よそ」の人が自分たちより劣勢であると認識できる時には優越感に似たようなものになって、「よそ者」に対する非礼がおおっぴらになることもある。

なぜこのように何かにつけて「うち」と「そと」という線引きをしなければならないかという点、日本の文化は全体的には共有性が高く、ほとんど同じなので自然に線引きする物がないのである。従ってその分、観念的に線引きをしているのではないかと思われる。つまり、日本の文化構造は比較

的に共有性が高いので集団の枠をはっきりと、しかもその都度、意識しておかなくては区別がつきにくくなってしまうためであると考えられる。従って、「内のもの」、「外のもの」という区別を無意識的に、自然に行う必要が出てくるものと思われる。

そして、ここで問題になるのは、「内の世界」の中であって対人関係を構築していかなければならない点である。このようにして枠づけされた「うち」を「そと」からのぞき見ることは非常に難しく、逆に「うち」から「そと」へ出ることに對しても「うち」の中での反応を意識しなければならない。このような「内の世界の対人関係」が日本文化を背景とした対人関係のあり方である。つまり、「内の世界」として堅い枠組みの中でうまくやっていくためには、まわりの動静をうかがい、もたれあいの中での共存となる。従って、自己主張をする練習が行われていないのであろう。上手な自己主張ができないという、国際評価を受けることになるのも「うち」の対人関係からのものかもしれない。

さらに、それは奇妙な依存関係として出現し、ときには日本文化特有の依存症としての病理を醸成することもある。アルコール依存症者の家族病理にみられる、共依存者の出現はこのような「うち」の文化の方が多産されやすいように思われる。また、「うち」の中にいる未熟な大人を保護し、依存し続けることを保証する可能性が濃厚となるのである。つまり、自分の「うち」の不都合なことは「そと」に出さずに背負い込んでしまおうとするのである。その重圧が「うち」の中の一歩弱いところの子どもに寄せられることになり、共依存者に育ててしまうのかもしれない。核家族化が進み、さらに少子化が進む日本の現状は、狭くて息苦しい枠の出現に向かう可能性があり、危惧されるべきことである。

しかし、「うち」が大きくなり全体に目が行き届かなくなると、異質なものは排除

しようとするような力が働くようである。北海道A市において教師と治療者によってなされた、不登校児救済の実践から感じられたことではあるが、義務教育では子どもを学校という枠の中に押し込めようとする過剰な努力が見られるが、義務の枠が外され高校生になると一挙に排除しようとする。こんなに簡単に退学処分にされて良いのかと何度も思ったことがある。制度が「うち」の機構を大きく逆転させるのである。また、「枠」の中を乱す子どもの救済に熱心に関わろうとする教師は、「他の同僚の教師」から強い攻撃にさらされることも多々見受けられた。

学校から排除された一部の娘たちは自らの共同体（スナック、など）を創り、その中ではかなり強い個々の結束が見られることがある。このような学校の在り方は個性を無視しようとするか、排除しようとするかの違いはあっても、「枠」の中を均一に保とうとする行為であることに間違いのないであろう。

学校を例にしたが、このように考えてみると一般には排除されたり、押しつけられたりすることを避けるためには、皆と同じであることが無難なことであり、たとえ、それぞれの職場で激しく競争すると言っても、つまるところもたれあいの群れの中で小差のところを抜きつ抜かれつする程度が無難ということになる。

しかし、このように強い枠の中であって、お互い共存する体験を持ったとしても、一度「うち」から出てしまうと、これまでの「うち」の中での関係は一挙に疎遠になるのも特徴である。

2 中国文化の「うち」と「そと」

これに対して中国人の持つ「うち」と「そと」は日本人の場合と違っている。中国にはある特定の会社に終身雇用されるという雇用制度がないために、職場、会社、学校を自分の「うち」であるという意識をもたない。従って、所属している会社や学

校を「うち」として表現もしない。つまり、会社や職場は雇用契約によって成り立っており、「私の職場」として捉える意識がないのである。それを敢えて自分の所属であると表現する場合には、「私たちの学校では……あなた達の学校では……」となり、人称は複数となる。そして、日本文化の「そと」に該当する表現をする場合には「彼らの」となり、三人称複数が用いられるのである。

中国人が「うち」と表現するのは、自分の家庭や家族を意味する場合である。ここでは一人称単数となり、私の「うち」、私の「家族」と表現する。つまり血縁の関係者に対してのみ人称が単数となるのである。

従って、日本人の用いる「うちの」は簡単に「私の」に置き換えられず、むしろ「私たちの」に置き換えられる場合にあてはまる。しかし、これが血縁関係である家族を「うち」と意味するときだけ、「私の」に置き換えられるのである。

つまり、中国人の「うち」はまさに「家」なのであり、それは血縁関係を意味しているのである。それ以外は「そと」であり、つまり他人のことである。

中国人は何よりも血縁関係である家族、そしてその次に家族同様なつきあいをしている、お互いに支えあっている友人を「うち」に含めるのである。

中国人の「うち」は家庭、あるいは家族を意味するので、共存も家族との共存となる。家族との共存はある意味では家族から暖かく包まれ、見守られているため、確かに心細くなく居心地が良いと感じられる。しかし、血縁関係を中心とする家族を丸ごと背負ってしまい、身動きがとれず家の犠牲になる危険もそこには潜んでいる。

実際に現実には血のつながりさえ持っていれば、すべての人が家族であるという考え方を重荷として感じる中国人も少なくない。その家族から一歩退いて離れ、羽ばたこうと思っても、血縁は簡単に切れるものでは

ないからである。父親は自分の価値観から逸脱すると思われる行動をとる息子を束縛しようとするときに、「あなたと父子関係を切る」と脅かしたりする。家族の關係にあって、父親の権限と責任は大きなものである。このように、中国の伝統社会は、父系制、すなわち子どもは父の親族集団に属するというシステムによって組織されている。この家の重要な構成員は父系出自を同じくする男性たちである。

従って、家族の中では自由自在に自己主張ができるかもしれないが、しかし、一旦何らかの行動として打ち出すときには、その行動にともなう家族への影響まで責任を持たされる。しかも、絶対的な権限を持つ父親を中心とした家族との共存關係は実には大変である。

このように見ていくと、中国では社会の基本的な単位は家である。そして、家族は一つの集団として経済、社会、政治の単位として機能している。中国人は他者に対して個という形で動きをとっても、その背後に必ずと言っていいほど家族がいると考えてよい。個人との対決は、その家族の全員との戦いであるとの覚悟が必要である。

中国人はこのような意識から姓に対する觀念が非常に強く、男女を問わず簡単に自分の姓を改めたりはしない。女性が結婚しても、男性が嫁の養子になっても（この場合は、生まれてくる子どもは嫁の姓を継ぐことになっている）、改姓せずに自分の実家の姓のままである。これは血縁を明らかにしておくためである。

また、血縁のない嫁は、家族の血を伝える役割を担うことにより、家族に含められる。しかし、嫁がその家庭において力を持つのは、自分の息子が家長になった時点からである。また、自分の娘が家を継ぐ婿を得てからであり、それまでは、嫁ぎ先において全く力を持てないのである。

かつて、中国人は婚姻關係を結ぶことを通して、家と家とのつながりをもとめてい

た。つまり、家と家のお互いの關係を強めるために結婚が特に望まれたりする。ただし、同姓である者同士の結婚は固く禁止されている。これを同宗不婚という。同姓者は同じ宗族に属していないこともあるが、同姓である者同士は、「五百年前是一家」といわれているように遠い過去の祖先でつながっているという感覚があり、父を介する關係のみならず同姓不婚がルールとなる。それに対して母親を介する血縁關係では、非常に近い者同士（イトコ）でも結婚が許されていた。

中国の伝統的な家では世代が増えれば増えるほど、しかも子どもの数が多く、全体の人数が多いほど理想的と考えられている。四世代あるいは五世代からなる家のことを「四世同堂」とか「五世同堂」といい、誰もが夢見る理想的な家の姿であった。しかし、現在の中国は1978年から一人っ子政策が実施されている。一人っ子政策をしばらく続けていくと若年層が少なくなり、逆に老年層が多くなるいわゆる高齢化社会が出現してくることが確実である。

また、子どもの数が減っているにつれて、家族構造も大家族から核家族へと変化しつつある。親の養育態度も昔の大家族構成に基づくものから、今日の核家族的変化にもなって大きく変わってきている。中国の伝統思想である「望子成龍」（子どもの出世を望む）という育児目標がさらに強く意識されることはいうまでもない。つまり、子どもへの期待過剰に基づいて極端な養育態度がしばしば見られるようになってきた。一人っ子に与える愛情が過多となり、子どもを扱うよりも「宝物」を扱うようになってしまい、必要以上に心配したり、世話をしたりする結果、「小皇帝」といわれるような子どもが多く出現するようになってきた。

血縁關係、父と息子というタテ關係を大事にする中国においては、親の期待を一身に背負っている「小皇帝」たちはこれから

いったいどのようになっていくかはまさに
危惧されるところである。

＊「うち」「そと」は意味が多義的にとら
れる場合に、「内」「外」は意味が比較的限
局されてとられる場合に、それぞれ区分け
して用いた。

III 文化に見る対人関係

1 日本文化に見る「裏向き」と「表向き」

さて、日本文化の「内の中」ではしのぎ
を削るといったいろいろな対人関係が考え
られる。「内の中」にあっては常に相手の
動静を窺うことになり、そのような状況で
育ってきたのが「裏向き」と「表向き」か
と思われる。我々が通常「裏」あるいは
「表」を会話に用いるとき、対語になって
扱うことが多い。たとえば、表通りがあれ
ば裏通りがあり、表道に裏道、表地に裏地、
表街道に裏街道というように「表」があれ
ば「裏」がともなってくる。

単独で「表」または「裏」を使う場合で
も、反対を連想させるように使われている。
「表を繕う」であれば、裏が破れているか
もしれないし、「裏をかく」では相手の表
を考えて裏から行くといったように、多層
的な関係要素を日本人の対人関係は含んで
いる。

「表」を「広辞苑」で引くと物事の外側、
上部の現れた部分、相反する面を持った物
事を目立つ方向から見て目に付く部分とな
っており、見えること、わかることに繋がる
のである。つまり、「表」とは外に出して
もいいもので、それは都合のいい物やこ
とであろう。そして、不都合なものは「う
ち」にしまい込んでしまうのである。こう
考えていくと「裏」とは見えない部分で、
奥に隠された不都合な物やことに接するも
う一方の出入り口ということになる。やは
り「広辞苑」では、「物事の人の目に触れ
ない部分、物事のうちで表に対するもう一
方の面、物事の内側や内面の部分、ある限

られた範囲の内部」であり、見えない部分
であると表現している。

不都合な物は「うち」にしまって不都合
でないものを「そと」に出していく。つま
り裏に隠して表に出すというように「表」
は「そと」への正当な通路であり、「裏」
は「うち」に隠しているものに通じる密か
な通路であると考えられる。状況に応じて
これらの通路を使い分けるのが、日本人の
対人関係の特徴の一つである。この通路の
使い分けを誤ったり、一方の通路に隔たっ
たりしたときに、対人関係において様々な
問題が出現するようである。

さて、このように考えてみると「表」は
見えるもので、外に出すものである。
「表」を「面（おもて）」と表現するなら、
それが「顔」を表していることは、理解で
きるであろう。

これに対して、「裏」は「うらぎる」（相
手の心を切ること）、「うらむ」（相手の隠
れた心を見ること）、「うらかなしい」（心
が悲しいこと）、「うらさびしい」（心が寂
しいこと）などから分かるように、外に出
さずに見せない部分、つまり「心」である。
従って、「裏」と「表」は、「心」と「顔」
の関係として意味づけることができるので
ある。

「顔で笑って心で泣いて」は、表向きは
平然として装っているが、実は泣いている
という状態や、「いつも笑い顔をしている
けど、内心では怒っている」というような
一つの表情を維持して、うらつまり心を隠
していることである。つまり、時には
「面」を被ることもあるのである。しかし、
日本語でのこの語の用い方は中国語の
「面」に比べて非常に少ない。能面をはじ
めとして、実際顔につけるものも種類は少
ない。後に論証するが日本人の場合、
「面」が随分薄いと思われる。日本人の
「面」は「裏」を透かせてみせるための
「薄い面」であると思われる。中国人の
「面」とは被り方がかなり異なるのである。

つまり、裏は表に隠れて見えない部分ではあるが、表は表だけを表すのではなく、また、裏を隠すためだけのものでもない。表が裏を表現することもできるし、裏が表を演出することもできるのである。日本人が人と対応するときには表を通して裏を一生懸命探ろうとする。表に出されたことばから裏を探るのであり、表を見るのはもっぱらそこに裏を見るためである。つまり、二層的なコミュニケーションの構造がある。日本人は、この二層的なコミュニケーションを日常の生活中で実に簡単にやっている。この、表から裏を読ませるために「薄い面」が必要である。このようなテクニックは、日本人独自のものであって、他に類を見ないコミュニケーションの手段といえる。まさに、「メヴィウスの輪」のような構造を持っていると、小山内（1999）は指摘している。

日本人が中国人と話していると「意味がよくわからない」と指摘されることがある。彼らは物事はすべて明確に処理しようとする。彼らはよく日本人が言おうとしていることが決してそのことば通りではない気がする」と指摘する。しかし日本人がいったい何を表現しようとしているのかは、はっきりつかめないことが多いと言う。一方、中国人の言い方は肯定か否定かがはっきりさせた表現をするのである。

日本人が日常簡単にやっているのけている二層的なコミュニケーションは中国人から見ると、実に不可解なことが多いのである。

2 中国文化に見る「里」「表」と「面子」

中国語の中に日本語の「表」「裏」と相応する「表 (Biao)」「里 (Li)」ということばがある。「表」はおもて、外側にあるものを意味する。「里」は中、内側、内部を意味する。「表」「里」を一緒に使っていることばが多くある。たとえば、「表里一致」「表里如一」（うらおもてがない、看板に偽りなし）、「虚有里表」（見掛け倒し）、「由表及里」（表面から内面に及ぶ）など

であり、日本語の「裏」と「表」の使い方とは幾分異なる。

中国では「表」「里」のある人を評価するときに、悪い表現をするときは「表里不一」（言うことと意思していることが違う。二枚舌、面従腹背である）という軽蔑的なことばに用いる。その人の「表」から「里」を知りたい時は、お酒に招待するのである。「酒後吐真言」ということば通り、お酒を媒介にして親しくなり、相手との距離を縮めるのである。つまり、「表」からじっくりと「里」に近づいていくのである。

日本語の「表」と「裏」に比べると、中国語の「表」「里」に関することば自体が少なく、もともと日本語ほどに機能的ではない。その代わりに、「面子 (Mianzi)」という重要なことばがあり、熟語も多く認められている。

「面」は、すなわち顔、面目、体面のことである。中国には「不識廬山真面目」ということわざがある。廬山はつねに霧がかかっていることで有名であり、つまり本来の面目を知らない、物事の真相がうかがい知れないことを意味する。

「面子」は、体面、名誉、顔を意味する。「講面子」「愛面子」「要面子」はすべて同じく体面を重んじることであり、面子をたてることである。「面」の同意語として「臉」（れん、lian. ①目の下。頬の上に当たる部分。②顔面。かお。）ということばがあり、体面、面子、面目を意味する。

「人有臉、樹有皮」と言われるように、人に顔あり、木に皮あり、人は体面を重んじるもの。旧劇の俳優のくまどり「臉譜」によって劇中の登場人物の特徴、性格を表したりしており、その種類も様々で実に多い。

「面」は「臉」とよく一緒に使われており、「臉面」は面目、顔、面子、体裁という意味を持つ。中国語では性格を表現するのに「臉」で表現することが大変多い。たとえば、「臉軟」（気が弱い、情にほだされやすい、情にもろい）と「臉硬」（気が強い、

押しが強い、感情に左右されない)が対語となっている。また、「臉大」(面の皮が厚い、顔がひろい)と「臉小」(顔がせまい、はにかみやである、内気である)が対語となっている。さらに、「臉急」(怒りっぽい、すぐカッとなる)、「臉熱」(気が弱い、内気である、情にもろい)、「臉善」(気が弱い、人が良い)などがある。性格だけではなく、感情を表すときに「臉」を使うこともある。「臉渋」(無愛想で笑顔をみせない、むっつりしている)、「臉酸」(嫉妬のために顔に怒りが現れている)などはその例である。

このように、「面子」は日本語で言う「表」、あるいは「建前」と異なり、他者との相互活動によって直接相手に対して生じるものであり、個人が他者ないし社会に対して示すものである。個人の面子に対する要求はいわゆる一種の自己尊重への要求でもある。面子は相手、つまり他者が存在する限りにおいて、その関係を通して生じるものである。中国人は人と人の間に深い遠慮を重んずる。自分と相手の「面子」をお互いに守ることは、むしろ一種の暗黙の了解である。つまり、傷つけてはいけないものであり、それは大切に保管される「仮面」のことであろう。また、「里」は日本語の「裏」、あるいは「本音」とは異なり、大変近づくことが難しい、他人に決して見せないものである。その「里」を外に見せないために「面子」が必要であり、事ある度に拘るのである。

さて、「表」とは、「おもてを上げなさい」、「おもてを汚した」といった使い方でわかるように「面(おもて、めん、つら)」であり、目に見える部分であり「顔」の上にもう一枚あるのである。一見、日本語と同じ意味と思われがちであるが実際にはかなり異なる。中国では、顔の上のもう一枚の顔、つまり「面」が非常に堅くて厚いのである。従って、「面」を外そうとしない文化、つまり「面子」を重んじる

関係においては、「裏」と「表」の連動性は育ちにくいのであろう。つまり、「面」での関わりは、「裏」はどうであれ、見えているところだけでの関わりである。従って、外に向かって、たえず「面」を保っていなければならない。「面」をはずすことのできる唯一の場所が、「家」の中の「家族」の前ということであろう。

IV 「本音」と「建前」

日本語に見る「裏」と「表」の対人関係の二層性から生まれてきたのが、「本音」と「建前」であると思われる。この「本音」と「建前」の使い分けが恰も悪いことのようにいわれているが、これを上手に使い分けことが日本人の対人関係の基本であると考えられる。この使い分けの下手な人が様々な不適応症状を示すことになるのであろう。

つまり、日本でも「本音」と「建前」は、その使い分けが悪いようにいわれがちではあるが、むしろこの両者を対人関係の場においてうまく使い分けてこそ、対人的な感情の軋轢が生じないようにしてきたのではないだろうか。

建前とは社会的規範であるとか、物事の道理であるとか「そと」に向けた理屈であって、これは自分を防御するためのものであり、つまり鎧兜であると考えると分かりやすいと思われる。これに対して本音は何かというと「裸の自分」であるといえる。建前は、社会的規範などに裏付けられているものなので批判のしようがないので、建前しか言わないことが批判されても、建前そのものは批判される要素を含んではない。

これに対して本音とは、その個人の真意である。本音を吐くと自分の評価にかかわってくるが多々あり、従って本音はなかなか吐けないものである。また、簡単に吐いてはいけないものでもある。わざわざ「本音で話そう」と相手が断ってくるこ

から、迂闊に話せるものではないことが推測されよう。このような場合には、「まずあなたの本音から聞かせていただきたい」と問いかけてみる必要を日本人である我々は十分に認識している。これは、本音というものが批判の対象になり得る可能性が非常に強いからである。日本人が友達をなくすのは、この本音と建前の関係において生じてることが多く、あるいは職場での対人関係に不信を持ったりするのは、このバランスが崩れたときに出てくるものと思われる。このように、「本音」で話すことを確認しあっていても、話の流れによっては、「本音」が「建前」になったり、「建前」が「本音」になったりするものが、日本人の会話であり、「本音」も「建前」もその時の状況によっては、交代するように思われ、つまるところ同じフィールドにあるように思われる。このような関係構造を先にも述べたが、小山内(1999)は「メヴィウスの輪的構造」と呼んでいる。中国人とは大きく異なる意味を担うのである。

しかし、これが中国では全く逆である。「本音」と「建前」を使い分けている人を「表里不一」として軽蔑され、信用も得られない。つまり、「建前」は「嘘」であると見なされるのである。

「嘘」に対する考え方は、日本人と中国人は異なっているように思われる。日本人の「嘘」は物事を順調に進められる、まるくまとめられるものであれば、「嘘も方便」と受け止められ、大抵許される。日本語のことわざには「嘘は泥棒の始まり」というのがあがるが、それは単なる「始まり」だけであり、嘘をつくこと自体への批判が弱いように感じられる。それと比べて、中国人はもし「嘘つき」と評価されたならば、その人は「最低な人間」とレッテルを貼られ、人格をすべて失って一生信用が得られないだろう。「嘘ついたら、姓を変える」という誓いの建て方があるように、血縁、および家族を重視する中国人は姓を変える

ほど、嘘をつくことへの抵抗が強く、嘘をつく自分を許せないのである。親が子どもを小さい頃から、嘘をつかないようにと厳しくしつける。逆にいえば、嘘をつくことは敵、あるいは自分の味方でない人に対してすることである。つまり、中国人はそこで自分の家族、味方となってくれる友人、あるいは民族とそうでないものとを線引きをするのである。

また、中国では、親しい、信頼のある人間関係を築きたいなら、「裸の自分」でいることが前提条件となる。しかし、中国人は家族を中心とする、つまり血縁に基づく人間関係を最重要視しているため、家族の中では常に「裸の自分」でいることが要求され、家族に対して自分の意見をそのまま主張する。しかし、家族から一歩外へ出ると、他人との関係を深く求めず、広く浅い関係であり、表面の关系到留めようとするのである。従って中国人は家族と、ごく限られた信頼できる友人関係の中に限って「本音」でつきあうことができるのである。また、家族、友人は「本音」を言っている本人を守り、支援する。

日本人は「本音」でつきあうことは難しいが、逆にいうと、一旦「本音」でのつきあいが成立すると、深い確かな人間関係が築ける可能性があるのである。

しかし、中国人は「本音」でつきあうことが家族の中で要求されるし、「本音」でつきあうことが、すでに家族の中で満たされているため、家族以外のところでのつきあいはむしろ広く浅いままで足りているのではないだろうか。つまり、日本人のように、「本音」と「建前」の使い分けを必要としない、対人関係の構造を持つのであり、それは「面」に留まり、いわゆる「表面」の関係となる。

V 文化と神経症

ここでは文化と神経症について若干の考察を試みる。神経症には多くの精神病理学

的視点から病理構造が明らかにされているが、われわれは神経症を、幼児期から現在に至るまでの人格の成長の停滞、あるいは歪みを持った状態であると考えている。つまり、これらの人格の未熟さゆえに対人関係がうまく保てなくストレス状態となり、身体や精神に様々な症状が出現してくるのである。このように考えていくと、神経症の症状を示す状態とは、人格が成長する機会が剥奪された状態をいい、そのことを解決していない状態にあるとの考えに到達する。

つまり既成の文化にうまく適応できないがゆえに生ずる、不適応状態であると考えてるのである。そこで、文化特有の神経症が産まれるように思われる（山中，1993）。酒木（1996）は内閉神経症（山中，1978）と視線恐怖症は裏と表の病理であり、日本文化を背景として産まれた独自の神経症であると主張した。また、日本に留学してきている中国人の多くに無自覚の心身症つまり未病が長期に認められるのである。これらは、中国文化を背後に持った神経症症状と思われる。

日本人は不都合なことを内の中にしまいこみ、それを外に出すにしても見えない通路である「裏」から出そうとする。つまり「裏」とは「心」であり「本音」である。日本語では感情の起伏を表現するのに「腹」で表現することが非常に多く見受けられる。たとえば、「腹が立つ」、「腹に収まらない」、「腹ふくるるおもい」、あるいは「腹を割ってはなす」、「腹が黒い」、「腹が太い」などと使われる。

対人関係の中で我慢することにより腹の中にいろいろなものがたまったときに、胃や腸に疾患が生じてくる。心身症の一部がこれにあてはまる。つまり心理的な原因で体中出现してくる病気のことである。そして、このストレス状態から脱しようとし、外界といっさいの交通を遮断してしまうのが「内閉神経症」である。もう一方では、

表ばかりを気にすることによって、相手から見られることを恐れる「視線恐怖症」というのがある。外国で見ることができないもののゆえ日本の文化を背景として出現してきた日本独特の神経症と思われる。「視線恐怖症」は顔にこだわっており、相手に見られることへの不安と同時に見てしまうことへの不安が同居している。「内閉神経症」は、腹に溜めることを避けるために、外界との交通を遮断する状態であろう。

「内閉神経症」の患者に心理療法の成果が幾分見られたときに、軽い心身症の症状を訴えることを少なからず臨床場面で体験する。

腹に溜めすぎてもいけないし、表を意識しすぎてもいけないし、ということになり、物事に対して「ほどほど」に関わることが大切である。つまり、上手な「本音」と「建前」の使い分けが、日本文化での適応の条件であると思われる。

これに対して中国人は感情を表現するときに、「腹」で表現したりはしない。しかし、中国人留学生は日本に来て、日本文化という異文化に適応していく初期の段階においては、かなり重症の心身症になる人が少なくない。胃潰瘍になり吐血した人、円形脱毛症になる人、ひどい下痢が長期におよぶ人、体重が短期間で極端に落ちる人、指導教官に会う度に書痙が出現する人などである。大抵彼らはその症状が顕著で重篤な身体の病気として出現するまでは、自覚的であっても病気の症状として認識しないことが多いようである。彼らは周りに自分が嘘をついていると思われることを危惧する。つまり「嘘は容易につくものではない」という考え方から、彼らは自分が嘘をついていると思われることに対して耐えられないのである。しかも彼らは総じて明るく振る舞っており、症状がストレスによるものであることを否定するのも、大きな特徴であろう。つまり、「面」を被っており、「面」が感情を代用しているのである。従

って、被っている面、つまり自分の仮面に気づけないことがあるように思われる。仮面に気づけないことが、症状がストレスによるものと気づけない要因であるのかもしれない。

また、在中日本人留学生を対象とする中国の大学における適応状況に関する調査によると（吉，1998），彼らは情緒の不安定を感じているようであった。たとえば、「最近感情の変化が激しい」、「最近何となく不安になることがある」、「寂しくなることがよくある」と訴えていたのである。また、身体に関しては、「最近疲れがひどい」、「よく眠れない」などと訴えていた。しかし、これらの中国という文化背景における日本人留学生の情緒に関する訴えは、具体的な身体症状まで至るかどうかわかり、つまり心身症として表れてくるかどうかはまだ確認されず、これからの研究課題である。

前にも述べた通り、中国人は家の中において、家族の前では裸の自分であり、本音を言い合うことができる。家族から一歩外に出て、他人との人間関係を持つときには面子と面子との広く浅いつきあいとなる。面子と面子でつきあうということは外に見せた通りに見てほしい、また見せたくないものは見ないで欲しいと要求していることを意味する。中国人留学生は自国であるなら家族の中で「面」を外せるが、日本では外せる場所がない。面子は中国人にとってはお互いに傷つけてはならないものであるため、彼らは絶えず自分をよく見せようと努力し、また相手を尊重しようとする。しかも、見せたいものだけを見せようとし、またみたくものだけ見ようとする過剰な努力が払われるものと推測される。その払われ続ける努力がストレスとなり、身体に疾患をもたらすのであろう。

中国人の成人死因の中で、トップを占めているのは癌である。さらにその中で肺癌と肝臓癌が一番多い。「煙酒不分家」ということばがあるように、一緒に煙草を吸っ

たり、お酒を飲んだりするのは人と人とのつきあいである。煙草、あるいはお酒を相手に勧めることは相手への尊重のしるしとなるため、勧められたら下手に断ると、「不給面子」、つまり「面子が傷つけられた」と怒られる。特に、お酒の席においては、「乾杯」と言って一気にお酒を飲み干して底を見せることは相手への最高の尊重となる。また、お酒につぶされて崩されることは大変みっともないことであり、最後まで冷静に、毅然としていられることは「海量」と高く評価されるのである。つまり、酒を飲んでも最初から最後まで「面子」を保つために、「面」を被っていないなければならない。従って、迂闊に酔うことができず飲酒量が多くなる。

迂闊に「面」を外すと「面子」に関わるゆえ、感情を押さえたり、装ったりする生活が、知らずと健康を乱す生活になり、ストレスが高まり、心身症を出現させているのかもしれない。

おわりに

対人関係の持ち方の違いには、現在の文化を育んだ歴史が大きく影響したと思われる。日本では自分がその都度所属している集団を重要視する。日本文化では「うち」と「そと」、「裏」と「表」、「本音」と「建前」の語を用いて、対人関係の構造が明らかにされた。これらがうまく機能しないときに日本文化を背景とした神経症が生じるようである。これに対して中国は、儒教精神を背景に持った家族中心の血縁関係を重視する民族である。そして、中国人は他者に向けて、「面子」を重要視する。「面子」は対面するときにお互いが尊重するものであり、傷つけてはならない大切な「面」である。この「面」はかなり厚く、「里」を覆い隠す役割を担っている。中国人は固くて厚い「面」をつけることでストレスを外に向かって発散させることが困難となり、心身症に陥りやすいと思われた。以上、日

常用いられることばを分析することによって、日中両文化における対人関係の構造を考察した。最後に神経症の症状形態が文化によって異なることを若干述べた。

付 記

本論文を作成するにあたり、貴重なご意見をいただきました名古屋市昭和保健所長小山内實先生に深謝いたします。

文 献

- 土居健郎 1985 表と裏 弘文堂
 吉 沅洪 1998 在中日本人留学生の異文化適応についてービリーフ・システムとアイデンティティの観点からー 日本カウンセリング学会第31回大会発表論文集, 203
 吉 沅洪 中国人の家族と血縁ー儒教精神を中心とする人間関係についての歴史的概観ー 臨床心理研究ー京都文教大学心理臨床センター紀要ー創刊号, 117-121
 邱 永漢 1993 中国人と日本人 中央公論社

- 増原良彦 1984 タテマエとホンネ 講談社現代新書
 森三樹三郎 1971 「名」と「恥」の文化 講談社現代親書
 小山内實 1999 私信
 酒木 保 1996 内閉神経症者の存在構造とその治療ー主に芸術療法的接近を試みてー 心理臨床学研究, 14(2), 121-132.
 酒木 保 1997 臨床心理学と予防医学 旭川医科大学保健管理センター年報, 3, 71-78.
 諏訪哲郎編 1987 現代中国の構図 廣済堂
 T&D, フーブラー 鈴木博訳 1994 儒教 青土社
 丁 秀山 1983 中国人の生活哲学 東方書店
 陳 舜臣 1983 中国五千年上・下 平凡社
 陳 舜臣 1992 儒教三千年 朝日新聞社
 山中康裕 1978 思春期内閉Juvenile Seculusion 中井久夫他編 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版社 Pp.17-62.
 山中康裕 1993 登校拒否と日本文化 精神科治療学, 8 (11), 1305-1311.

ABSTRACT

A Study of Culture and Neurosis between Japan and China in View of Language

JI Yuanhong AND SAKAKI Tamotsu

The interpersonal relation in Japan is quite different from that of China. Japanese people tend to stick to 'Waku'. For example, in Japanese, 'Uti' & 'Soto', 'Ura' & 'Omote', 'Honne' & 'Tatemaie' are on the basis of this way of thinking. On the other hand, Chinese people usually stick to 'kinship'. 'Biao' in Chinese, or 'Li' doesn't have so many meanings as that of Japanese is. But the expressions that stick to 'Mianzi' are various.

Not a few researchs show that eye-to-eye confrontation phobia and seclusion neurosis can be more often seen in Japan than in China, which is related to Japanese way of thinking about 'Waku'. Among Chinese people, however, the number of those who are psychosomatically sick is enormous, which is one of physical symptoms. They tend to adhere to 'Mianzi'. The difference of appearance of these symptoms between Japan and China is closely related to the interpersonal relations created in their own cultures.

In this research, we thought about how the interpersonal relationship in both Japan and China had been created through their own cultures, and attempted to find the difference of symptoms of psychoneurosis among both countries.